に痘科同盟会があったことがうかがえる．伯寿は，痘瘡に対し，隔離と治痘に対拠しようとしたが，今日伯寿の治痘術は伝承されていない．伯寿は，池田の治痘術と異なると述べていることからこの点でひとつの対立点があったと考えることができる．また池田流の治痘術は，痘瘡が発症した後のことであり，伯寿の問く隔離論は社会的に影響が大きいものであり，池田側は隔離論をとっていないことも対立点として挙げられる．断毒論版木押収事件は，医学界の流派間の抗争と考えられ，まもなく版木が返還されたことからみても，幕府による橋本伯寿断圧とは異なる性格のものであると考えることができる．

25）平安貴族は本当にお歯黒を付けていたのか？

Did the noblemen of the Heian Period really wear 'Ohaguro' on the teeth?

京都市開業　東　智

Satoshi Azuma, *Kyoto City*

平安時代を舞台にした時代劇を見ていると，時折，白粉にお歯黒，引眉（ひきまゆ）という化粧をした男性貴族が現れる．こうした演出を行う際の時代考証に用いられる最も古い史料が，恵命院宣守が1420年に著した『海人藻芥』で，「（鳥羽院）の御代以前は，男が眉の毛を抜き，鬢をはさみ，金（かね）を付ける事一切之無し」と記している（注：金は鉄漿（かね）付け，お歯黒のこと）．但し，出典は不明である．1784年頃に伊勢貞丈が執筆した『貞丈雑記』には，源有仁がお歯黒を始めたと記している．しかし，引用する『今鏡』は有仁が強装束を始めるなど衣紋道を極めたと記しているが，お歯黒や引眉については全く触れていない．なお，鳥羽上皇の生年は1103年，没年は1156年であり，源有仁は1103年と1147年である．

『貞丈雑記』は，『平家物語』や『源平盛衰記』に平忠度がお歯黒を付けていたとの記述が続く．1184年の一ノ谷の戦いの中で，忠度や敦盛が討ち死にしていく場面は，琵琶法師の情感深い語りもあって，聞く者の涙を誘ったことであろう．それとともに，戦場においても薄化粧にお歯黒を付けているという貴族化・軟弱化が平氏の衰退を招き，質実剛健な源氏に討ち滅ぼされたという演出効果も上げている．ところで『平家物語』や『源平盛衰記』には虚構や誇張が多く，史料としての取扱いには十分な注意が必要である．『平家物語』は1221年に起こった承久の乱以前に成立していたとの説があるが定かではなく，成立当初の物語がどのようなものであったかでさえ不明である．仮に『平家物語』の成立時期を承久の乱の前後だとしても，一ノ谷の戦いから40年近くが経過している．平氏一門の武将たちがお歯黒をしていたことにも疑問を挟んでよいのではないだろうか．

『とりかへばや』という12世紀後半に著された物語がある．男性として生きてきた妹君が女性に戻る場面で「（髪は）尼のほどにふさふさとかゝりたり．眉抜き，かねつけなど女びさせたれば……」とあるように，お歯黒，引眉は女性が行う化粧と記している．時代設定が成立時期に近いとすると，男性貴族がお歯黒をするようになったのは，早くても12世紀末のことになる．

男性貴族のお歯黒について記した最も古い確実な記録は，藤原定家『明月記』の1226年7月29日の日記である．「成実，今日直衣始．女院に参ず（直衣の色甚だ濃し．鉄（かね）を付け，眉を作る）．」鳥羽上皇の崩御から70年が経過している．すでに誰もが見慣れたお歯黒を記すということに違和感を感じる．12世紀前半に男性貴族がお歯黒を始めたという従来の通説を覆すだけの資料は見つかっていない．しかし，承久の乱の後，政権が鎌倉幕府に掌握され，貴族社会の様相が変化したことに伴い，お歯黒が男性貴族に浸透したという推論を提起したい．

26）華岡青洲が考案した外科結び

Seisyu Hanaoka devises the way of connecting called surgery knot.

袖ヶ浦市　長谷川　弥

Hisashi Hasegawa, *Sodegaura city*

華岡青洲が考案した外科結び

1846年モートンによるエーテルガス麻酔成功